



くたちの先生としてやってきました。そして、あの彼岸獅子が、今も受けつがれている理由を知ることができました。

昔、ぼしん戦争という戦いを会津がしていた頃、鶴ヶ城のお殿様に使いが来たのですが城のまわりは敵だらけでした。それで、どうにかして城に入りたかった使いは、ぼくたちの村に獅子おどりがあることを思いつき、獅子おどりをしながら、城にいっしょに入ってほしいと頼んだのだそうです。敵がそのおどりを見て

うとすると、兼子先生に呼びとめられました。

「何だ、練習は終わったぞ。」

ぼくは、練習時間を午後とまちがえていたのです。その日はしかたなく帰りましたが、次の練習のときに、すぐ後かいることになりました。ぼくが休んだ日に「おかさき」のところをやったらしいのですが、ぼくは全うできませんでした。前回のときに、他の人はマスターしていたのです。獅子がしらは三つしかありません。三人で組んでおどるのが、獅子おどりです。ぼくはこの中に入れるだろうか、不安は増してきました。

どんどん発表が近づいてきました。ぼくは、一つの決心をしました。

どうしても舞台でおどってみたいと思ったので、昔おどったことのある祖父に個人練習を頼むことにしたのです。祖父には、

「足の使い方がだめだ。」

「手のさばきはすばやく。」

「昔はできないところがあると、ムチでひっぱたかれたんだ。」

などときびしいことも言われましたが、最後まで、ぼくの練習につき合ってくれました。つらい練習をがまんしてやれたのは、あの獅子がしらをかぶりたいという願いの方が大きかったからです。

祖父との練習の成果が実ってか、

ぼくは雄獅子、雌獅子、太夫獅子の中の雌獅子に選ばれました。あこがれの獅子がしらをつけ、との様からいただいたというもんが入っている

あつけにとられている様子が目にかび、おかしくなりました。小松の彼岸獅子が今でも受けつがれている理由は、こういうところにあったのだと思います。ますます、ぼくも三人の中の一人としておどってみたいになりました。でも、おどりの練習はかん単ではありませんでした。まず、両手にわりばしを持ち、動きを覚えるところから始まりました。太鼓を打つような手の動き、足の上げ下げ、それに頭の動き、その上それをやりながら場所の移動もしなければなりません。だから、おもしろいなんていってられないことが分かりました。一緒に始めた健君は、なんだかどんだん上手になる様な気がして、少し不安になりました。

一学期の終わりにクラブの手紙がわたされました。何と、夏休み中も練習があるという知らせでした。でも、十月にある川小まつりでおどるためにしかたがないのかもしれないと不安です。その夏休み中に、ぼくは大失敗をしてしまったのです。

その日も、練習があるというので学校に行きました。練習場所に行こ

